



1.伸一さんが中学生のときに描いた祖父。2.梁に毎年1本ずつ結びつける縄。3.煤で黒光りする神棚。4.お正月の餅飾り。5.祖父が献上する粟を育てていた畑を示す碑。6.お供える新ジャガイモの煮物。7.ペットのチャボ。8.動物好きの妻が連れてきた猫、ニライ。9.薪ストーブの上で70年以上使われている鉄瓶。

く焼けた肌に無駄のない身体は百姓そのものといった出で立ちだが、農家になってまだ4年だ。床の間には、祖父が昭和天皇に穀物を献上したことを記念する碑が飾ってある。壁には、父が和牛の良し悪しを競う大会で県代表に選ばれたことを讃える賞状が掲げられている。父も祖父も専業農家で、少しでもいいものをつくりたいと一生懸命に働く人だった。伸一さんはこの家の長男として生まれた。物心ついた頃から「おめはこの家の跡取りだ。天井の蜘蛛の巣までおめのものだからな」と言われて育った。学校から帰ると、夜遅くまで外で働いている祖父や父の帰りを待ちながら牛舎の糞を掃除するのが彼の役割だった。農家に良いイメージも悪いイメージもなく、当然のように「農家になるもんだ」と思っていた。

しかし高校卒業時、「俺は自分の家の農業しか知らない。世の中のことを知らなくていいのだろうか？」とそのまま農家になること



素朴で豊かな食卓を4世代が囲む。

夏は農作業に精を出し、冬は部屋にこもって藁細工に勤しむ。囲炉裏の煤で真っ黒になった家には4世代6人が住んでいる。薪ストーブで湯を沸かすところから一日が始まる。真夏でもそう。朝食には自家製の納豆や梅干し、漬物が並び、沸かしたお湯で淹れたお茶をすする。今日は初物のジャガイモをお供える日だからと、煮物の椀を神棚に置いて手を合わせる。畑には年間200種類の作物が植えられ、その半分は自家用だ。あまりにも前時代的なその暮らし方は、現代社会へのアンチテーゼかと思うほどだ。しかし本人たちには全くそんな素振りはなく、当然のように楽しく日々を送っている。先代からの暮らしを変えずに受け継ぐこと。そこにはどんな意味があるのだろうか。

農家になるもんだ

今回の主役はその一家の大黒柱、高橋伸一さん(43)。浅黒